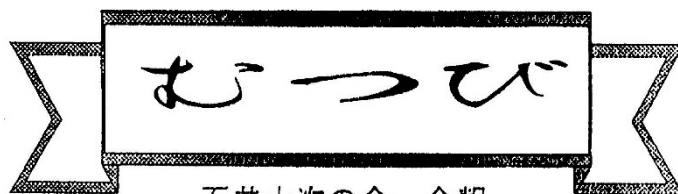


2020年
(令和2年)
4月13日



271号

石井十次の会 会報

つつみ ながあき
堤 長発

—石井十次を支えた先人たち(1)—

石川 正樹 (石井十次の会 監事)

石井十次を支えた先人の一人に堤長発がいる。堤は十次より16歳年長であったが、親しく交際し、物心両面で十次を支えた。その一端を物語るエピソードをまずは紹介する。

明治37年6月30日、宮内省からの呼び出しに応じて出頭した石井十次は、思いがけず明治天皇から恩賜金が贈られることを告げられた。

「岡山孤児院 その院、創立以来無告の孤児を救済し、成績すくなからざる趣聞こしめされ、聖上皇后両陛下より、思し召しをもつて金二千円下賜候事。 宮内省」

十次はこのときの感激を「予はこれを棒持して驚喜惶悚こもごも至り、感きわまりて自ら言う所をしらず」と述べた。この報を聞いてわがことのように喜んだのが堤長発である。彼は当時宮崎県農工銀行頭取の職にあったが、早速十次に長文の祝辞を書いた。

「貴下多年御赤誠、天聴に達し、今般両陛下より格別なる御恩恵を蒙らせられ候由、伝承つかまつり、大慶至極に存じ奉り候。(中略) 重豊もつて御光栄の御儀、辱交小子輩に至るまで面目を施しそうろう心地いたし、世に有難きしあわせに存じ奉り候。(後略)」

1. 堤長発の生い立ち

堤長発は嘉永2年(1849)8月に鈴木百助の3男として、高鍋・上江村に生まれた。7歳のとき藩士・堤長善の養子となる。8歳で藩校・明倫堂に入学する。14歳のとき養父・堤長善が藩命で江戸に赴くのに随従。江戸藩邸には藩主・種殷の異母弟・種樹がいて、幕府の学問所奉行を勤めていた。種樹は幼少から学問にすぐれ、昌平黌に学び安井息軒ほかの学者の薫陶を受け、のちに將軍・家茂の侍読(講師)を、明治維新後は明治天皇の侍読をつとめた。堤長発は種樹に漢籍や詩文の指導を受ける。明治2年、東京大学(元の昌平黌)に入学、勉学衆にぬきんで、在学452人中より選ばれて寮長となる。廃藩置県のものち、宮崎県に出仕。学務を担当し県立宮崎学校の教師を兼ねる。明治10年1月千葉県属となり、翌11年大蔵省に出仕し銀行業務を担当。明治20年東京控訴院書記官となり、23年裁判所書記長に昇進。この時の官位は高等官4等官で、年俸は1,000円を支給された。中央官界での前途はひらけていた。

2. 児湯郡長として郷里に貢献

ところが明治25年7月に、宮崎県児湯郡長に招請される。当時は県知事の下に郡長のポストがあり、児湯郡長が前任者の辞任で空席となっていた。児湯郡長には高鍋出身者になるという慣例があり、永峯県知事は高鍋出身で大審院判事の職にあった三好退蔵に人選を依頼してきた。三好退蔵は堤長発に「児湯郡長の職はどうか」と聞いた。三好は堤より4歳年長であったが、かねてから昵懇の間柄である。三好は早くから堤の能力を認め、中央で活躍するようあとおしをした。大蔵省への出仕も三好の尽力による。

中央官界での活躍を目前にして、堤はこの招請を引き受けるか否かの岐路に立たされた。彼

は秋月種樹に相談した。種樹は「宮崎県知事ならまだしも、児湯郡長では気の毒」と答え、なお熟慮するようすすめた。堤は熟慮の上、児湯郡長を引き受けることにした。中央での活躍を断念し、郷里の要請に応えることにしたのである。官位は 8 等官に下がり、年俸も 600 円に下がることも承知の上であった。

児湯郡長に就任した堤が着手したのは、公立高鍋学校の振興であった。本校は明倫堂なきあとの中等教育のために明治 18 年に田村義勝が設立したが、明治 23 年になって生徒数が激減し存亡の危機にさらされていた。郡長みずからが管理者となり、校長に早稲田専門部を卒業したばかりの城重雄を迎え、授業内容を充実させた。学校は立ち直った。彼は高鍋学校を県立中学校に昇格させようと努力したが、宮崎県の財政難のため実現せず、公立（町村組合立）のままで終わった。

3. 宮崎県農工銀行の初代頭取に就任

明治 29 年、政府は勸業銀行法と農工銀行法を成立させた。中央には勸業銀行、各府県には農工銀行を設立した。宮崎県農工銀行の初代頭取には、堤長発が選任された。彼はその日をもって児湯郡長を退任した。当時の日本は農業が基盤であった。工業立国のきざしはまだ見えない。自立した農業経営者に低利で融資し、農業を発展させるのが農工銀行の役目であった。

堤長発は 23 年間の長期にわたり宮崎農工銀行の頭取を勤める。堤の経営手腕はすばらしく宮崎農工銀行は全国でトップクラスの業績をあげ、堤は全国の農工銀行の指導的立場につく。

①岡山孤児院音楽隊を宮崎市に招致

明治 40 年 11 月、堤は岡山孤児院音楽隊を宮崎市に招致し、^{たちばなざ}橘座で慈善音楽会を開いた。開催通知を堤みずから書いた。入場券の販売、寄付集めも率先した。会計も自分でつとめた。終わると収益金を次の送付状とともに石井十次に送った。

「拝啓、(前略) 楽隊ご派遣の儀、早速ご承諾ください、おかげにて都合よく結局いたし、一同満足の至りにごさ候。(中略) 都合純益金八百九拾八円九拾二銭と相成り候。関係の県官中には千円以上に及ばざれば、貴院に対して相済まずと尽力の次第もこれあり候えども、意の如くならざる次第、よろしくご了知願ひあげ候」

②岡山孤児院を訪問

明治 42 年 4 月 13 日、高知での農工銀行会議に出席し、帰りに岡山で下車し岡山孤児院をたずねた。岡山駅で十次の出迎えをうけ、その夜は大原孫三郎をまじえて会食。翌朝、孤児院の朝集会で十次は孤児全員に堤を紹介した。その日は十次の案内で孤児院内をくまなく見学。夕方は炭谷小梅も来訪して夕食を共にし堤は孤児院に一泊。翌日、岡山を発って宮崎に帰った。

4. 十次を見送る.

大正 3 年 1 月 6 日、石井十次が腎臓炎で危篤に陥った旨を柿原政一郎が電話で知らせてきた。見舞の電報を打つ。30 日、病勢にわかにかまるとの電話があり、間もなく永眠の報が来た。2 月 4 日、堤は茶臼原における葬儀に参列し、十次の早すぎる旅立ちを見送った。会葬者はなはだ多く、地方には稀有の盛葬であった。

大正 8 年 7 月 17 日、堤は農工銀行頭取を 71 歳で退任した。高鍋町筏に屋敷を建てて隠棲。大正 15 年、長男・^{ながのぶ}長述の招きに応じ上京。昭和 2 年 9 月 23 日永眠。享年 79 であった。

(終)

参考資料：「堤長発君小伝」泥谷良次郎著、「信天記」西内天行著

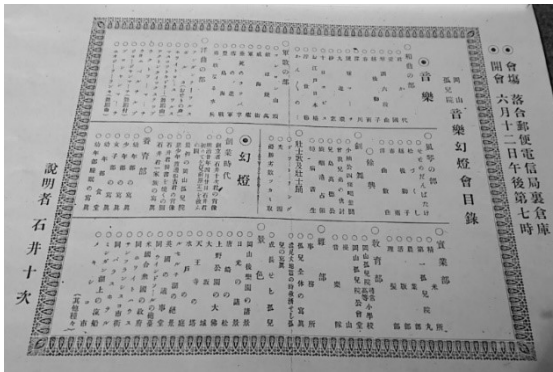
感動を呼ぶ十次の「岡山孤児院音楽幻燈会」

岡山孤児院が「岡山名物」と称されるほど有名になったのは、音楽幻燈会の成功が大きいと言われている。十次は、孤児院音楽隊の演奏と、幻燈機を使った岡山孤児院についての説明、いわばプレゼンテーションを合体させた「音楽幻燈隊」を結成し、各地を巡業した。

音楽隊の演奏の合間に十次が登場し、幻燈機で孤児院の様子がわかる写真を映しながら、孤児院の成り立ちや現状などを説明した。後には、幻燈が活動写真に替わり、孤児院の生活を撮影した記録映像を上映するまでになる。そして、いずれの会場でも、感動した観客から多くの寄付が集まった。

石井十次資料館に、当時の「音楽幻燈會目録」(プログラム)が展示してある。

前半は【音楽】で、「和曲の部」、「軍歌の部」、「洋曲の部」、などに分かれ、曲名がずら



【音楽幻燈會目録】

りと並んでいる。剣舞などの「余興」もある。後半は【幻燈】で、「創業時代」から始まり、「養育部」、「実業部」、「教育部」、「雑部」と続いている。これらは、孤児院内の様子などを写したものと思われる。最後は、国内外の都市や建物の風景写真と思われる「景色」で締められている。

幻燈だけでもかなりのボリュームだが、十次は、写真の配列などを自ら設計し、説明文句を熟考の上、幻燈の時間を45分程度に納めたそう。柿原政一郎書「石井十次」に、聴衆の前に立つ十次の姿を、綿密に描写している場面がある。

身長 五尺七寸余(一・七三米)、体重二十二貫(八二・五疋)、大兵肥満の彼は腹に白木綿をシッカリと巻き、木綿袴に木綿の紋付を着け、竹杖一本を携えて、只一人説明台に立つのである。底力に充ちた張りのあるバス音声で、どんな大会場でも隅々まで徹した。かくて樸直な九州音で説き來たり説き去る処は、過去十年、彼が血と涙と信仰の実績であり、三百孤児の実情であった。例外なく満堂の聴衆の心肝に訴え、涙と感激とを誘うのであった。



十次のカリスマ性のある堂々とした容姿・張りのある低音ボイス・強い意志を持つ瞳。十次のプレゼンテーションが相乗効果で共感と感動を呼び起こすのだろう。

寄付金も集まるはずと納得してしまう十次の「岡山孤児院音楽幻燈会」である。

(編集委員 成合仁子)

《 お し ら せ 》

★新会員のご紹介（敬称略）

【日向市】 高山 克巳 黒木 英一

【都城市】 新森 裕樹 蒲生 直志

和田 将弘

【宮崎市】 児島 和豊

【横浜市】 松井 清

★ご寄付をいただきました（敬称略）

【鳴門市】 宮城 正行

★2/21～3/20 の資料館来館者

団体・グループ 0人

個人 22人 合計22人

ここまでの掲載者は編集委員会開催の都合により3月20日までのものとしています。

★当面の行事

- ・鯉のぼり掲揚から降納

4月18日（土）9:00～

5月 9日（土）9:00～

- ・田植え

4月 下旬（天候次第）

- ・石井十次の会 総会

5月17日（日）11:00～

★5月号の通信発送作業

5月11日（月）9時から印刷・製本

12日（火）9時から製本・発送

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

社会福祉法人 石井記念友愛社

後援会「石井十次の会」

☎ 884-0102

宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-1

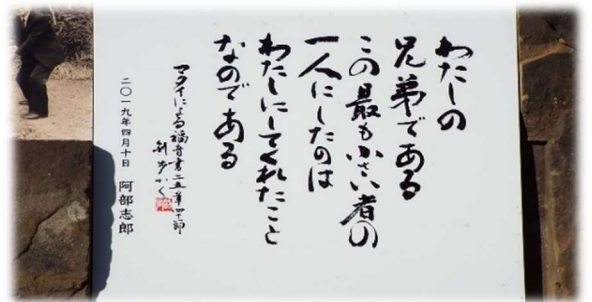
TEL/FAX 0983-32-4612

メール

yuuaisya-jyujinokai@ki-jo.jp

●阿部志郎氏の記念碑建立

石井十次賞受賞者で児嶋草次郎理事長の恩師でもある氏が来園されたのを記念して茶臼原台地を見つめている十次像の庭の一角に建立されたもので、「ゆうあい通信」2020年1月号に詳しく記載されています。碑文は、聖書の中にある一節です。来園の際はどうぞ。



阿部志郎氏来園記念碑

●「ゆうあい通信」・「むつび」発送作業に友愛園の園生11名がお手伝いにやってきました。お蔭様で早く終わり、「感謝」「感謝」です。



作業中の園児たち

※ 編集後記

3月は別れの季節といわれます。友愛園からは、女子3名、有隣園から男子1名、女子1名が卒園しました。

「石井十次の会」からも卒園生5名にそれぞれ祝い金を贈りました。

十次の基本理念で生活した卒園生はここで培った友愛精神に誇りを持ち、将来の目標に向かって邁進していかれることを期待します。

・・・文責 生駒